



遠藤 秀一

大阪芸術大学芸術学部建築学科
1989年卒業

NPO法人ツバルオーバービュー
代表理事。ツバル国環境親善大使
(2010年～)。
環境活動家として「ニューズウィーク、
世界が尊敬する100人の日本人」
にも紹介されている。

ツバルから学ぶグランピング的 自給自足生活のすすめ

「インターネットって食べられるのかい？」飛行機のトラブルで2週間もかけてたどり着いた島国ツバル、その首相秘書官からの質問に面食らいつつも、つたない英語であれこれ説明する会議に出席したのは1998年6月のことでした。

ツバル国は気候変動と、それによる海面上昇で近い将来沈んでしまうだろうと危惧されている南太平洋にある島国です。しかし、それは専門家界限だけの話で、1万人の国民の将来を心配する人はごくわずかな時の話です。

大学卒業後就職したゼネコンの設計本部では、大学時代から目指していた「環境に配慮した建築」は受け入れられず、8年後に退社しインターネットに特化したデザイン制作会社を設立した直後のことでした。

ツバル国のトップレベルドメイン「.tv」(日本は.jp)の運営主体を決める入札に参加するために訪れた同国の首都は、手つかずの南の島の楽園というお決まりのフレーズのために存在するような美しい島でした。



ツバル国フナフチ環礁・首都機能がある島の空撮



南太平洋特有の美しい夕景。



満潮時に海水が湧き出して洪水となった首都のとある村。環礁島はその構造上、地盤沈下することはない。

その時、目の当たりにしたツバルの人々の自然に寄り添って生きる自給自足の暮らしぶりは、拝金主義がしっかり染み付いていた私には衝撃的で、お金がなくても自然の恵みで幸せに生活する人々の姿はカルチャーショックでさえありました。しかし、そこではすでに気候変動の被害が顕在化していたのです。

飲料水がとれる井戸と伝統的な主食であるタロイモ畑の塩害は20年ほど前から発生しており、海岸侵食や島の中央部に海水が湧き出す洪水被害なども報告されていました。もともと海拔の低い環礁島が、近い将来沈んでしまうと言われていることは大きさではないと感じました。

この美しい光景と矛盾する被害をできるだけ多くの人に知ってもらいたい。帰国後すぐに、講演会・写真展、執筆などの活動を始めました。その後、活動をNPO法人化し、ツバルへのエコツアーの運営、現地でのマングローブ植林、テレビ番組の制作協力・出演、COPと呼ばれる国際会議への出席。できることはしらみ潰しに行ってきました。

講演会では「ツバルを助けてください」という話はしません。ツバルの人々のお金に頼らない暮らしぶりから学んでほしい。それをヒントにして新しい生活を始めて欲しい。という話を続けてきました。この問題はツバルだけではなく、近い将来、私たちにも大きな影響を与えることは明白だったからです。

2010年、東京から鹿児島県の山間部にある曾於市財部町に生活の拠点を移し、体験施設「山のツバル」を開設しました。食とエネルギーを自給自足し、お金への依存を最小限にする暮らしの確立をめざしています。

生活の糧を外部に依存すればするほど、地球資源を無駄に消費し気候変動に加担してしまいます。自給自足はそれを阻止するばかりか、食糧難や自然災害時に身を守ることができる暮らしです。この挑戦に多くの人に参加することは、気候変動を含む昨今の社会問題の解決への近道になると考えたのです。

食料は「自然農(=耕さない、肥料・農薬を使わない)」で賄っています。トラクターなどの農業機器に頼ることなく、体力と時間をかけることで、ほぼ無料でお米と野菜を育てることができます。また、周囲に豊富にある森林資源を活用する薪ストーブや薪風呂、囲炉裏。竈門なども使用しています。ソーラーパネルのオフグリッドシステムも稼働しています。



築80年ほどの古民家を改修した施設。ゼネコン時代の経験を活かしてのD.I.Yによる改修は日課の1つ。



たまの贅沢の一コマ。憧れの囲炉裏ライフが手軽に楽しめる暮らし。



山のツバルの薪小屋とソーラーパネル、薪を含めて筆者の手製。手前は自然農の畑。

しかし、100%の自給自足は不可能です。デザイン制作会社からの収入で社会保障費や税金を支払い、自給できないものは購入する「半農半X」の暮らしです。それでも、お金に振り回されていた頃と比べると自由な時間が増え、四季折々の自然をたのしみながら、不安の少ないゆとりのある暮らしが実現できています。

鹿児島での生活を始めて14年が経ちました。この間、気候変動は威力を増すばかりです。猛暑、巨大台風の襲来、経験のない豪雨災害などに直面するにつれ、この暮らしが、気候変動を止めるためではなく、止められない気候変動から身を守る安全保障になっていることを再認識させられます。

昨今の気候はやばすぎる、こう思っている人も多いかと思います。人材を求めている限界集落は幾多もあり、そこには、二束三文の貸家や、無料の耕作放棄地もあります。グランピング的自給自足生活に週末だけでも取り組んでみてはいかがでしょうか？多くの人が挑戦することで、私たちが直面している最大の課題「拝金資本主義からの脱却」も大きく進展すると考えています。



講演会の講師依頼は随時受け付けています。また、筆者が運営している未分離デザイン研究所では、写真撮影や各種デザイン制作の他に建築学科卒の経験を活かした、建築



紹介動画・竣工記念動画の制作も手掛けています。ご興味のある方はQRコードからご参照ください。